

韓国江陵大関嶺城隍祭

—集落における神霊の機能—

佛敎大学・関西大学非常勤講師 佐藤 文子

二〇一五年六月一日韓国江原道東

部の江陵市で開催された端午祭の前祭を調査する機会を得た。端午祭は韓国では、旧暦の正月や秋夕とならぶ重要な年中行事で、その年の豊作・豊漁を祈る祭である。江陵端午祭は、儒・仏・道の融合した伝統的祭儀の内容と芸能性の高さから、二〇〇五年には世界文化遺産に登録された。二〇一四年はセウォル号の事故をうけて開催が自粛されたため、一年ぶりの開催となった。

現在の祭礼の内容を簡単に示すとそれは、以下のようなものである。

旧暦四月五日 神に捧げる酒を醸す
旧暦四月一五日 大関嶺山神祭・国

師城隍祭

旧暦五月三日 迎神祭

旧暦五月四日〜七日 朝尊祭

旧暦五月七日夕方 送神祭

今回の調査では、これらのうち収穫を祈る端午祭の前祭にあたる城隍祭を取材することができたので、こ

れを中心に報告する。

前祭は今日では、丸一日で終了するようになっており、以下のような順で執行された。

一、大関嶺山神祭

二、大関嶺国師城隍祭

三、邱山城隍祭

四、鶴山城隍祭

五、奉安祭

城隍祭は人々にとって重要な端午祭が滞り無く無事に遂行されるために必要とされる前祭であり、鎮めと護りの祭である。すなわち、山神および城隍神は、事情があつて祖先祭祀によつて子孫に祭られることができない「無主孤魂」を束ねており、不安定な状態では災いの基となるが、それを丁重に扱うことで、大切な端午祭の期間の安泰を守護してくれる。日本風に翻訳して考えると疫神祭であるが、前祭としての位置が確定しており、城隍神は「無主孤魂」が宿った神木とともに、端午祭が無事終わるまでの守護をするのであるか

ら、疫神祭として独立しているわけではない。

城隍祭の開催にさきだつて醸酒が行われる。かつての江陵官庁（朝鮮時代）である七事堂（チルサダン）とよばれる建物に注連がはられ、男性がたずさわつておこなわれる。七事堂では、江陵市長および市民から献納された米・麴をつかつて祭り用の酒と餅が作られる。神前に供える祭酒はいわゆる口噛みの酒系統の発酵酒で、アルコール発酵ではなく乳酸発酵に近いものであつた。

市民に頒布されていた神酒は、米と麴でつくる甘みのある濁り酒（いわゆるどぶろく）、餅は米の粉を蒸



写真1 七事堂（チルサダン）

大関嶺の北中腹には、山神堂と城隍堂が並んでおり、祭儀は堂の前で行われる。堂の背後（嶺がわ）には、二股に分かれたくぬぎの木の根本に「山神」と刻した石があり、ここでは山神が木の根本に宿る神霊であつ



写真2 山神堂

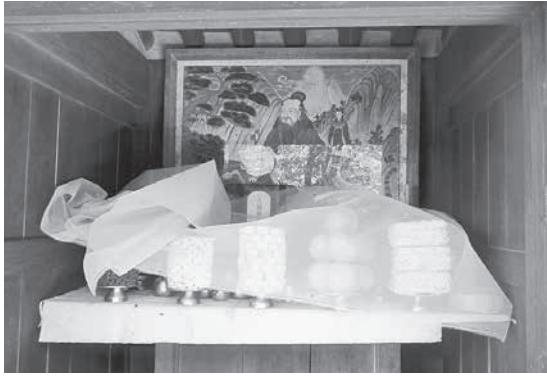


写真3 山神堂の主神

たことがわかる。また泉水の湧く洞（竜神か）も信仰の対象となつている。

山神堂の堂内には武将にはみえない神像が描かれている。現在はそれを三国統一に功績のあった新羅の將軍金庾信（キムユシン）としている。金庾信は韓半島の人々にとつては建国の父ともいふべき重要な神であり、慶州にある金庾信の墓には、日本統治時代に破壊されるまで、金庾信祠堂があつて、国民的な信仰を集めていた。

金庾信には、日本の御霊信仰にも似た興味深い伝承がある。すなわち金庾信の死後、彼の子孫が無罪で誅殺されたことをめぐって、死者であ



写真4 大関嶺国師城隍堂の主神

る庾信の魂が、同じく死者である新羅の始祖味鄒王（ミチユワン）の魂にむかつて抗議をした。自分は生きるときは武功をあげ、死んでからも国を守護している。にもかかわらず我が功績は忘れられ、子孫は誅せられるにいたつた。こうなつたからにはもうどこかへ行き、国のためにいそしむことはやめたい、というのである。

味鄒王の魂からこのことをきいた王の子孫は、金敬信を庾信の墓に遣わして謝罪の旨を伝え、庾信の発願で建立された鷲仙寺に功德田をたてまつつた、という。この伝承は『三國史記』ほか数多くの文献に収められ、人口に膾炙する著名なものとなつている。祭神としての金庾信の祭り上げの経緯や神格の性質に深くかかわる物語である。

くぬぎの根本の山神は、ほかの集落にも見られ、もともと特定の人物ではなかつたはずだが、勇猛な神であり、また丁重に扱わなければ、機嫌を損ねる神であることから、いつしか（おそらくそう遠くない過去において）金庾信にイメージが重なつたものと思われる。

大関嶺の国師城隍堂の主神は、かの梵日国師であるという。梵日国師は、曹溪宗の名僧である以上に、江陵の人々にとっては、故郷の生んだ



写真5 山神堂の祭官の儀礼

偉人と捉えられており、祭礼においては近接する集落の女城隍神との婚儀があり、二人の息子があるときされる。

山神堂と国師城隍堂の前でそれぞれ、祭官が祝文を読み上げる儒教的儀式と楽隊と巫（ムーダン）による祝願の「クツ」がはなやかに行われる。ムーダンによるクツは、その芸能性の高さから、最近になって、祭儀に習合したようにも思われる。江陵の集落の祭から観客を意識した祭に発展したときに、はなやかな楽隊の演奏、ムーダンの唄と踊りによるコンサートが整えられたのではないだろうか。というのも、山神と国師城隍神に対しての祭儀としては、供



写真7 蠟燭にかざした紙



写真6 国師城隍堂のムーダンのクツ

え物を調べて祭り上げ、祭酒を献じ、祝文で人々の意思を申し上げたところで、目的は達成されるからだ。堂への神降ろしであれば、ムーダンの唄は、儒教的祭礼の前にプログラムングされなければならない。

私にとってはじめてみる、でもどこかであんなような気がする体験のな

かで、小休止がとられた。市民は国師城隍堂のなかで、神に願いを捧げる。二人のムーダンがそれに寄り添い、神への願いを伝えてくれる。ムーダンが典具帖紙のような軽い透き通るような紙を蠟燭にかざすと、手元から浮き上がり、燃えかすも残さずふわりと消える。堂の中で現地の方のはからいで、神に捧げられた祭酒を飲ませてもらった。日本で浅漬けのもとと言う名前で売られている液体とかなり近いにおいがした。

堂から出ると、市民はめいめいレジャーシートを敷いて、餅と魚（鱈か）の干物を食べていた。豊作祈願の祭であるため、みんなで分け合って食べることに意義があるらしく、配布テントにもう残りが無いことに気づいた人たちが、私のために餅と干物を分けてくれた。餅はその食感から、米の粉を何かで発酵させて蒸したものに思われた。

私の見た二〇一五年の祭礼では、このあとに大関嶺山頂付近から神木（もみじ）を伐りだし、人々はこれに群がるようにして、城隍堂の前で五色の絹布（イエダン）を結びつけ、めいめいの名前と願い事を書き付けていた。この間楽隊はかまびすしいほどの演奏をしつづけ、華やかな衣装のムーダン集団は花笠踊りのように踊り歌う。これこそが、ただの木



写真9 神酒



写真8 神木と五色の絹布



写真10 鶴山城隍堂のムーダンのクツ

が神木になるために必要な手順であり、ムーダン集団の宗教的重要性はむしろこのシーンにあったのではないかと思う。

この神木は、あたりにさまよう霊のために用意された依り代であるらしく、祭の一行は、堂がある北腹から歩いて山頂を越え、歌舞音曲のな

かを国師城隍神の位牌とともに、この神木を担いで練り歩きながら南麓へ下山した。

ここからの行程は現在は若干ショートカットされている。祭官とムーダン・楽人の一行はトラックに乗り、私はテレビ局の取材班の車に乗せてもらって、小学校に立ち寄る。ビビンパと豆腐と神酒（こんどこそアルコールであった）が振る舞われ、参加者みんなが飽食した。遠来の私には瓶ごと神酒が渡された。

国師城隍神が国師女城隍神とともに奉安されることで端午祭の前祭としての城隍祭は完了するのだが、江陵市内にある国師女城隍祠までのルート上には、現在二箇所立ち寄

りスポットがある。それが邱山城隍堂と鶴山城隍堂である。

邱山城隍堂は、江陵市内から大関嶺へ向かう古道沿いにあり、いわば街道沿いの茶店か宿屋のような立地にある。この城隍神は大関嶺国師城隍神の息子であると伝える。ここで梵日国師に息子が二人いた、という口碑になんとなく納得がいく。禅僧が結婚して息子が二人という説明をそのままにうけると、いかにもちぐはぐなことになるが、たとえば日本で見慣れた風景で言えば、淀川の渡辺津から上陸して熊野へと参詣する街道筋には、たくさんの休憩スポットがあり、そのいちいちが熊野の御子神ということになっている。祭礼の一行が立ち寄るスポットが城隍神の御子神という位置づけになるのである。邱山城隍堂では、現地の村人が祭官を務め、ムーダンの「クツ」だけが行われ、祝文は読み上げられない。かつてここが、祭の一行が道すがら休憩し、宿泊して村人にもてなされ、「クツ」が芸能として披露される場であったことが明らかである。

鶴山城隍堂は、梵日国師の故郷とされる場所にあらたに設けられた祭場である。堂はなく、石積みのかいを馬蹄形に作り、祭壇が設けられている。供物には果物類のほか、豚

の頭が鎮座していた。現地の村人達が順々に祭壇に礼し、ムーダンの「クツ」がはじまる。私はとにかく豚の頭ばかりに目がいき、体はどこへいったんだろうかとか、思っていると、ムーダンが豚の頭をもちあげて、石積みを取り巻くように見守る市民のもとをまわりはじめた。それぞれが身を乗り出して豚の口に紙幣を挟んでいた。こうなると興行のようでもある。この鶴山での行事は一九九九年に始められたことで、端午祭で語り継がれた神話の再現であると聴いた。

国師城隍神と国師女城隍神を合祀（ハプセ）する儀礼は、冥婚と似た要素があるが、違う要素もあるように思う。女城隍神は聞き取りをする人ごとに違った説明があり、鄭氏出身の不遇なる女性というところだけが一致する。神として祭られることになる女性の生前が詳しくわからないのはよくあることで、不遇なる出来事から名誉を挽回されることじたいが祭り上げの動機となっているからである。

またこの合祀には、普段なわばりを異にする城隍神同士を協力させ安定した状態をつくり、複数の集落にまたがる大きな祭の成功を祈願するという機能をもたせている。二神の位牌をならべて奉安するとともに、た

くさんの「無主孤魂」を依らせた神木はしずかにその傍らに安置される。奉安祭の終わりはいたってしずかである。ムーダン集団は五色の上衣を脱いだ白い装束で祭官たちの後ろに控える。城隍祭の結びとしては鎮めのシーンであるので、きわめてふさわしい演出ではあるが、往事はここでも芸能が披露されていたと聞く。

日程の事情で今回は調査することがかなわなかったが、端午祭の後祭では、無事に祭りが執行されるのを見届けた城隍二神を送り出す送神祭が行われる。儒教式の儀礼のあと、くだんの神木が祭堂の中央に立てられ、ムーダンが国師城隍神を神木に降ろし、大関嶺が見える場所に移動させて、位牌や装飾品などとともに燃やすのだという。江陵端午祭は城隍神に見守られて挙行され、城隍神を送り出して幕を閉じるのである。

【付記】

今回の調査に当たっては、資料提供・現地随行・通訳にいたるまで韓国綜合芸術大学池美玲氏の全面的な協力をうけました。また江陵端午祭主催関係者および江陵市民の皆様には、大変お世話になりました。記して謝意を申し上げます。

*なお本稿は科学研究費補助金による研究「日本における仏教と神信仰の融合に関する総合的研究—アジアとの比較

の視座から—」（基盤研究（B）、課題番号二六二八四〇一五、平成二六、二八年度）の研究成果の一部である。